

第1回 第3次さっぽろ都市農業ビジョン策定検討会 委員意見要旨

1. 「新規就農・担い手・農地」についての観点

〈新規就農・担い手について〉

- ・新規就農者を増やすには、どの程度の規模で、何戸の新規就農を目指すのかといった具体的な目標設定と、それに基づく支援・補助の議論が必要である。
- ・さっぽろ農学校の受講生を新規就農者として育成・定着させる仕組みがあれば良い。卒業後に農地や支援策へつなげるフォローアップ体制も必要である。
- ・札幌は、「新たに農業をしたい」というイメージはないと思う。「札幌市だからこそ農業をやりたい」と思うような施策が必要である。
- ・農産物を「作る」だけでなく、「売る」体制も考える必要がある。札幌の農業は観光要素もあるので、そこで農業の強みをPRするべきである。また、移住者を就農に結び付ける体制の整備も必要。
- ・過去は「定年後に健康のため就農」する例も多かったが、補助金を受けても長続きせず離農するケースが多かった。今後は意欲ある担い手や小規模な生産者をいかに持続させるかが課題である。
- ・担い手不足が深刻化しているため、市民が実際に農作業を手伝い、賃金を得ながら学ぶ仕組みを整えることで、労働力不足の解消と市民理解の深化につながる。

〈農地について〉

- ・現段階では、農地を斡旋している制度は整っていないため、新規就農に踏み出しやすくするために、農地マッチングやフォローアップ体制が必要。
- ・農地の減少が進むなかで、市街化区域の農地をどう保全・活用するかが重要な課題である。

2. 札幌市の農業についての観点

〈札幌市の営農について〉

- ・酪農では土地代や設備投資が高額で回収が困難。さらに堆肥の臭気問題から都市部での営農継続は難しくなった。今後は臭気を抑えた肥料づくり（堆肥）が必要である。
- ・北海道は、寒冷地仕様の品種・品目を作るケースが多いが、地球温暖化の影響で生産が難しくなることを懸念している。札幌独自の取り組みが必要である。

〈札幌産農産物について〉

- ・札幌で作られた野菜は、札幌で消費してほしい。地産地消を促す施策や、札幌産農産物を学校給食で優遇的に使う取組があると良い。
- ・市街地に大型直売所を設置すれば、農家の販売意欲が高まり、消費者も新鮮・安全な農産物を安価に入手できる。小規模な直売所を各地に増やすことも有効である。
- ・「さっぽろとれたてっこ制度」は産地表示制度に切り替わっているが、市民への浸透不足と、生産者側の活用イメージ不足の課題もある。販売促進と「札幌産」の認知向上につながる工夫が必要である。

〈スマート農業について〉

- ・担い手不足を補うために、AI 農業やドローン導入といったスマート農業に対しての補助があれば良い。

〈さとらんどについて〉

- ・さとらんどを「食育」の拠点として充実させる場として、小学校・中学校の炊事遠足、さとらんどで作った野菜を収穫し、その場で料理するなどの体験が必要である。
- ・修学旅行生をさとらんどに呼び込み、農体験の場として活用できれば良い。
- ・さとらんどを土壌診断の機能だけではなく、農産物の品種改良や試験等の場として「農地として残す」ことが重要である。
- ・さとらんどのイベントを知ってもらうために、電子チラシで学校からさとらんど通信やイベント情報を低コストで情報発信することが良い。

〈広報活動について〉

- ・良いイベントはたくさんやっているが、市民が知る機会が少ないため、「広報活動」の施策を行うべきである。

3. ビジョンのまとめ方など

〈基本理念について〉

- ・基本理念の中にも、「広報活動」に係るワードを入れた方が良いのではないかな。
- ・計画の柱として「担い手」「市民」の2つがあるが、連携していく姿が分かる整理とすべき。
- ・「育てる」というキーワードがあるが、子供達が農業や食の重要性を理解する「心を育てる」ことが分かりやすい表現が必要。

〈第2次さっぽろ都市農業ビジョンとの違いについて〉

- ・ 現行のビジョンから、どう変化しているのか具体的な視点の説明が必要。また、まちづくり戦略ビジョンと次期農業ビジョンの関連性についても肉付けが必要。